
シュウ・シラカワ、外史に降り立つ

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュウ・シラカワ、外史に降り立つ

【Nコード】

N64390

【作者名】

S

【あらすじ】

真・ナグツアート撃破から一年後のシュウが、外史の管理者からの依頼を受けて様々な世界へ降り立つお話です。最初の世界は…真・恋姫十無双！！

プロローグ

マサキ達と共に真・ナグツアートを退けて一年…シュウは様々な文献を漁っていた

（…やはりヴォルクルスそのものを消滅させない限り私の枷は外れませんか…）

デスクに最後の一冊を置き、シュウはそのまま目を閉じる

（しかしヴォルクルスの本体を復活させてこの世に現界させるには九大司祭全員の力が必要ですし、私もその役職に戻らねばなりません。

それでは私の意識はまた…）

そんな事を考えていると…シュウはいつの間にか眠ってしまっていた。

（む…？ここは…夢…？）

暗闇の中でシュウは一人立っていた。意識は随分とハッキリしているが…他に何が見えるわけでもない。

（夢にしては感覚がハッキリしすぎていますね、しかしこれは一体

…)

「あらー！！ごめんなさいねいきなりこんなところに呼び出しちゃって」

シュウは後ろからの声に反応すると、そこには…

ボディビルダーみたいなふんどし一丁の男が立っていた

「…貴方が私の意識を呼び出したと？」

「ええそうよあ…ちょっと色男な貴方に頼みたい事があってね」

体をくねらせバチン　とウインクしてくるボディビルダー。

だがシュウはそれに動じることもなく相手を警戒しながら話を進める

3

「…まずはお話を伺いましょうか」

「あらあらそんなに警戒しなくてもーじゃあ単刀直入に言っわ。あなたにとある世界に行って貰いたいの」

「世界：平行世界に行けと？」

「そっちじゃないわね、あなたのいる世界とは全く違う世界よ。そこであなたに生きて欲しいの。報酬は…」

男はウインクしながら言った

「貴方の枷を無効化するための情報よ」

「…ヴォルクルスの本体を倒す以外の方法で枷を無効化できると言うのですね？」

「ええそうよ。ワタシはその無効化する力となる存在を別の世界で見つけたわ。もし貴方が私の条件を呑んでくれるなら、貴方が帰ってきたときにその世界へ貴方を送ってあげる。」

嘘を言っているようには見えない。ヴォルクルスの存在を知っていて私の意識を自らの空間に呼び寄せることができる存在。かけてみる価値はありますね…

「私はその世界に何年いればいいのですか？あまり長い間そんな世界で人生の時間を取られたくは無いのですが…」

「大丈夫よお、貴方の本体はここで眠り続けてるだけ。意識が肉体を伴って異世界に現存するから貴方の寿命とかにはほとんど影響ないわ。もし死んでもここに意識が戻るだけよ」

「ですが貴方の望む結果が得られなければ…私は情報を提供しては頂けないのでしょうか？」

シユウはボディビルダーを見てフツと笑った。

「その世界で何をすればいいのかも聞かされずにただ生きる…ですか。」

シユウは顔を上げてボディビルダーを見る

「いいでしょう…現時点のこちらの世界ではもうヴォルクルスの本

体を復活させるしか方法が無い…この依頼…達成して差し上げますよ」

「話が早くて助かるわ　じゃあ早速と言いたい所だけど約束してほしいことがあるの」

「なんででしょう？」

「貴方は魔術を使つては駄目よ。向こうの世界に【氣】は存在するけど【魔術】は存在しないの。だから一切の魔術使用は禁止…ただし、相手が明らかに魔術を使つて来た場合は許可するわ。」

「フツ…平和な世界にとばされるわけでは無いことは理解しましたよ。わかりました、約束しましょう」

「お願いね　私の名前はチョウ蝉よ　また会いましょう」

（！？）

シュウの視界が一気に明るくなり…そのまま意識を失った。

エン伶との出会い

「…ツツ…ここは…」

シュウの視界に見慣れぬ天井が入る

（…外史の世界とやらに來たのでしょうか？）

シュウは脇に置かれた椅子に自分の衣類が畳まれているを見た。
すぐに確認するが衣服やアクセサリーなどは無くなっているはいないようだ。

今はパジャマのようなものを着ていた。

「失礼？目は覚めたかしら？」

突如扉から女の声がする

「ええ…貴女が私をここに？」

「まあ運んだのは私の配下ですけど…ところで入ってもよろしいかしら？」

「…しばし待つて頂けませんか？着替えだけさせて下さい」

「わかりましたわ」

シュウは自分の衣類を身につけると扉を開けた

そこには…金髪の髪を腰までストレートに伸ばした美女が立っていた。

年の頃は30前後だろうか…どこことなく中国を思わせるデザインの赤の衣服に身を包み、下は膝上程度までのスカートを身につけている。

どこことなく気品を感じる美女をシユウは一つしかない椅子をベットの前へやり美女に進めて、自分はベットの端に座った。

「ふふ、初対面の見ず知らずの女なのにちゃんと扱ってくれるのね？」

「最初の質問の答えからして貴女は命の恩人なのかも知れませんかね。」

女は柔らかい笑みを浮かべて首を振った

「確かに荒野に倒れてた貴方をここまで運んだのは私達だけど、それは貴方の体を気遣うのと同時にこの国の民のためにしたことよ。」

そして彼女は真っ直ぐシユウを見つめると

「私の名はエン伶。字は公初。この洛陽にて帝に使える大尉よ…貴方は？」

「姓は白河、名は愁と言います。字はこの国の人間では無いのでありません。」

その答えに満足したように軽くまた笑みを浮かべながら頷くエン伶
「結構よ白河愁、では幾つか質問させて貰うわね？まず…この国の
人間では無いのならどこから来たのかしら？」

シュウは少し難しい顔をした。言っても理解されないだろうから

「…さて、なんと言えいいのでしょうか。別の国とも違う世界だ
と言って起きましよう。」

「ふうん…？なるほどね。つまり貴方はここから私達中国人が現在
の文明行けるような場所からは来ていない…ということね？」

シュウは正直驚いた。目の前の女性の聡明さである。一つの質問
で幾つも答えを得てゆく彼女に興味が湧いた。

「ええその通りですエン伶殿。貴女は聡明な方のようにですね…。」

「ありがとう白河愁さん…うーん長い名前ね？少し摘んでもいいか
しら？」

「では愁と」

「では愁さん、愁さんは何か目的があつてこの洛陽へ？」

「いえ、確かに私には目的がありますが、それはこの世界で成し得
る事ではありません。ただこの世界に来たのは偶然ではありません
が」

エン伶は少し考えると

「つまり愁さんの目的を達成する途上でこの国に来なければならなかった…」

「ええ、ただこの世界で私が何をするかなどは何も決めてはいませんがね」

（なるほどね、彼は恐らく第三者からの依頼でここに来た、ただ何をすればいいのかは聞かされていない。）

「…わかりましたわ。では一つ約束して下さい。この洛陽において領民に害をなすことはしないこと。」

「それだけでいいのですか？」

「構いませんわ。後は愁さんの好きなようにして頂ければ。ところで…」

エン伶は屈託の無い笑顔を向けてこう言った

「私のところで少し働いてみませんか？愁さんお金も持ってなさそうですし、私のところで働いてくれるのであれば、お給金が出るまでの間の食事、家、雑費なんかは私が用意致しますわ」

ニコニコ顔のエン伶。年の割に凄く無邪気な顔をするものだとしゅうは思った

「フツ…私を手元に置いておいた方が安心というわけですね。それに私にしてみればお金を合法的に貰えるのは好都合。ですが一つ言

「つておかねばなりません」

「何かしら？」

「私の世界の知識をこちらで披露する気はありません。私のいた世界では貴女達とは文明の発達が余りにも違いすぎますからね。」

エン伶はニコニコ顔を崩さず頷いた

「一部の人間の才に頼った国なんてすぐに滅びるわ。それに愁さんの知識をいきなり披露したらそれこそ世は乱れそうですし……うふふ、心配しないでいいわ」

「ならば私はしばらくエン伶様の所でお世話になりましょう。ですがあくまで一時的なことであるのを忘れないで下さいね。」

「ええ、よくつてよ 後、愁さんは私の客将として働いてる時間は私と行動を共にしてもらいます。」

「客将ですか？」

「ええ、私直属の部下ではないのですから様づけもいきりません。それに戦闘にも貴方が行きたいというまで連れては行きません。普段はこの世界の事を文献や民と触れ合いながら知ってもらい、大体解ったら私の補佐役をして頂くわ」

「補佐役……こんな見ず知らずの得体の知れない男を？」

「だって優秀そうだし」

「はあ……」

「愁さんは知らないでしょうけど、私のエン家は四世三公を排出してる名門なの。だから代々使えてくれる家臣がいるわけなんだけど……」

エン伶はため息をついて

「私が生まれる以前からの配下の家同士の派閥があってね……それに何代も続いてるせいで実力より家柄主義なのよ。儒教の影響かしら……。」

またため息をつくエン伶。

シュウは黙って話を聞いている

「私もそんな名門に生まれて厳しい教育を受け、元服してすぐお仕事づけの毎日で……優秀な人材を探す暇もなかったのよね。一応南皮の太守っていう地方の纏め役みたいなのに任命されてるんだけど洛陽から離れることも滅多になくてね……。」

（これは……しばらく話を聞かないといけないみたいですね）

三時間ほどエン伶の愚痴は続いたのだった。

売春宿の少女（前書き）

文才なさすぎて泣けてきます。

後、シュウが少し優しくすぎるかな…まあ敵には容赦無くすればいいのかな…

グダグダですがどうぞ。

売春宿の少女

side シュウ

エン伶の元に来て早くも一月が経過した

この国の基本的な知識を大体収めた私は一週間ほど前からエン伶の補佐役として宮中に入入りするようになった。

大將軍何進、十讓侍の張讓など現在の政治の中心人物とも顔を合わせている

しかし大將軍は元肉屋で戦争知識もロクにない。

十讓侍は政務など知らずに民から汲み上げた血税を自分達の所に回るようにすることしか考えない小悪党

以上が私の見解です。

エン伶も大尉という役職についているが実権は何進にあり、戦に置いてはエン伶が何進を補佐する形になるという。

さてあの肉屋がエン伶の進言を聞き入れるかは、はなはだ疑問ですがね。

さて今日はエン伶の補佐についてから初の休日です。

エン伶は仕事が新たに入ったらしく私の事は気にせず休日を楽しんでと言って宮中に向かった。

私は洛陽の街へ繰り出した。

確かに栄えてはいるが貧富の差が激しいですね。

着ているものが立派な人達が街の中央を

みずばらしい身なりの人達は脇を歩き、路地裏に消えてゆく。

貧富の差は仕方のないことですが、上に立つものがしっかり政治をしていれば多少なりとも改善できそうなものです。

まあ彼らは権力の亡者：期待するだけ無駄ですがね。

さて、この世界で私が何をすればいいのかわかりませんが、あのチヨウ蟬という男の雰囲気から察するに悪い事をしろと言う風には見えません。

こんな時代に送られたのならば恐らくは

乱れた世を正し、この国に平和をもたらせということでしょうか。

それを達成するにはまず方法を考えなくてはいいけません。

まず第一の案としてはエン伶に協力するのが一番無難でしょうか。

聡明でカリスマがあり上に立つ者としては申し分ない素質があります。ピアン博士の時と同様とまでは言いませんが、彼女なら私は力

を貸してもいいでしょう。

ただ彼女の陣営は話を聞くとかなり派閥が入り乱れており、私がそこに入るとなると…家臣の意識改革が必要になりますね。大粛正も考えなければなりません。

まあこれは洛陽にいる一部のエン伶配下だけでは何も出来ません。実際に南皮にいる配下達を見てみないと何もわかりませんね。

第二の案は私自らが台頭するというもの

ですがこれは今の時点では難しい。漢という国が微弱でも機能している以上、大義名分がなければ旗揚げしてもただの賊。

それに国を率いるなど王位継承権を放棄した私には…ね。

やはりエン伶の補佐を勤め続けるのが妥当なのでしょうか。

シユウは適当に歩いているとそこは歓楽街だった。

ほう…やはりこのような時代にもこういう店はあるんですね。

チラリと何件もある店の方に目をやる。

む…？

そこにはガラの悪い男に絡まれている女の子がいた。

少し様子を伺ってみる。

「おいおい嬢ちゃん！！なんで喋らないんだよ？なあ？嬢ちゃんが袖を引っ張ってきたんだろうが？」

「あっ……………」

「あっだけじゃわかんねえだろうが？なあどこのどついう店なのか聞いてんだよ？ちゃんと答えるよ！」

「わ……………わた……………」

「あゝたく意味わかんねえ！！帰らせて貰っぜ」

「あっ……………」

男は女の子の前から立ち去った。

まああれでは仕方ないですね。

綺麗な黒髪をポニーテールにして可愛い女の子なのですが…

女の子はシュンとした様子で自分の店の前と思われる場所に戻った。

チラリと店に目をやる。

どうやら下は飲み屋で二階が売春宿になっているようだ。

飲み屋で気に入った娘を上で抱けるシステムなのだろう。

しかしあれでは指名も来ないのではないだろうか。エン伶に聞いた話ではお金の為に人身売買されるよりはこういう店で働いた方が安全は保証されていると聞きました。

彼女も家族の為などの理由であの店にいますのでしょ…

そんなことを考えていると彼女はこちらにやってきた。

「あつ……………あつ……………」

彼女は必死に何かを喋ろうとしているが、声が止まってしま…

「あつ……………」

彼女は私の顔を見ると…私の手を取り指をなぞりはじめた。

これは…文字ですね。

私のお店で飲んでいってくれませんか？

という訳でいいでしょう。

しかし…読み書きができる娘が何故このような場所で…

少し興味が沸いた私は

「いいでしょう、ただしお酒と食事だけですよ?」

彼女はパアッと顔を輝かせてこちらに何度も頭を下げると軽く手を取り店に案内してくれた。

お店に入りテーブルに座ると彼女が隣にかけてくる。

店のメニューで中間程度のお酒を頼む。

「貴女は飲めるのですか?」

すると彼女はまたこちらの手を取り

（はい、でもお酒少し弱いです。）

と、伝えてきた。

「ではお茶でも頼みましょうか。」

シユウはやや高級なお茶を彼女に入れた。

彼女はまたシユウの手を取ると

（ありがとうございます、わたしはトウガイと申します。今日は宜しく願います。）

と伝えてきた

「トウガイさんですね、私は愁と覚えて下さい」

にこやかに頷くトウガイ。すぐに先ほど頼んだお酒とお茶が運ばれてくる

「では…二人の出会いに乾杯と行きましょう」

トウガイはコクコク頷いて陶器を合わせた。

「トウガイさんは何故ここで働いているのですか？」

（恥ずかしながらお金の為です。病弱な母と幼い妹を養わなくてはいけないのですが、当時13才だった私にはこれくらいしか…）

12を超えれば一応大人として見られることもあるこの国で、女の子一人で稼ぐにはやはり体を使うしか無いというような話をした。

ちなみに一度彼女を抱いた人が、また来てくれるためそこそこ稼いでいるらしい。

（私はこんな感じでまともに人とお話する事が出来ません。一応読み書きは出来るのですが、なかなか完全にこちらの意志を伝えるのは…）

「仕方ないでしょう、普通の人達は普段食べる物や売買する物の漢字程度しか覚えませんか。教育を受けていないのですから」

（はい、だから接客も難しく、先程伝えましたように二階で稼い

でるんです。あつ、ごめんなさい愁様のお相手をしてるのにこんな話を)

「いえ、構いませんよ。一応今、私は大尉殿の元で働いています。こうして様々な民の生活などを聞くのはとても為になりますからね」

(お役人様だったのですか！？ごめんなさいこんなお店に連れ込んでしまつて…お役人様ならもっとちゃんとしたお店に行けるのに)

「そんなところで飲んでも民の生活を知ることとは出来ませんよ。気にしないで下さい」

(はい…！)

その後、愁はトウガイから様々な事を聞いた。治安、生活、民の国に対する不満、更にトウガイ自身の事。元を辿れば代々国に仕えてきた家の生まれで幼い頃は文武を叩き込まれていたらしい。

だが父が流行り病で亡くなり、親戚もほとんどが亡くなってしまふ。

また、父は小隊長より出世が出来ず、余り貯金をする人間でもなかった。たので家は貧しかったらしい。

だからトウガイは暮らしのために、父の知り合いの紹介を得てここで働かせてもらっているとのことだった。

(今でも1日に少しだけ武芸の鍛錬を一人でしてるんですよ。この仕事で太るわけにはいけないので体型を維持するのもいいんです)

「そうですね…、確かにトウガイさんは健康的な美しさがあります。その黒髪と相まってとても魅力的ですよ」
するとトウガイはちよつと赤くなつた後に

（ありがとうございます愁様、愁様もとても魅力的なお方です）
と伝えてきた。

そしてしばらくして愁は店を出る。

「トウガイ、今日は有意義な時間を過ごせました。また機会があれば寄らせて貰いますよ。」

（はい、ありがとうございます。こんな私でよければお待ちしております）

最後に少しだけ愁にの胸に顔を埋めて彼女は店に戻っていった。

（フツ…たまにはこういうのも悪くないですね）

しかし彼女程に読み書きが出来、正しく相手に言葉を伝えられる能力があれば、文官や書記官として働けると思うのですが…

少なくともあの書記官ならばあの店で働くより稼げるのではないのでしょうか？

少し気にかけて見ますか…

シュウはそんな事を考えながら家路についた。

真名（前書き）

誰か文才を下さい… o r z

相変わらずグダグダですがどうぞ。

真名

私がトウガイと会った次の日、エン伶の執務室でトウガイの話をしていた。

「文官もしくは書記官ね…うん…愁が言うのだからきつと優秀な人材に育ってくれそうなのだけど…」

エン伶は珍しく難しい顔をしている

「やはり…身分ですか」

シュウの質問に頷くエン伶

「ええ…この洛陽において体を売っていた人を召し抱えるのはちょっと厳しいわね。私の領地であれば問題は無いのだけれど…」

まあわかつてはいたことです。エン伶がトウガイを欲しがっているのが垣間見えただけでもよしとしましょう。

「…そうですか。まあ本人の意志確認も取っていませんし、頭の片隅に置いて頂ければ」

エン伶は笑みを浮かべて頷いた

「わかったわ。貴方が私の元にて部下を持つ立場になったら考えましょう。私の元から離れないのならいつまでも私の補佐役に留め

ておくつもりもないですから」

「それで構いませんよ。さて、今日はエンへの街道にあらわれた賊の討伐準備でしたね」

エン伶はまた難しい顔をする

「そうよ。全く都近くに賊が出てしまうなんて世も末ね…大尉を勤める私がいうことじゃないんだけど…はあ…」

「軍権を持っているのは何進です。彼は何故今回も出陣しないのですか？」

「賊如きに大將軍様が出るまでもないって事でしょ。私も大尉なのに…大体時代が時代なら大將軍なんて役職は…ブツブツ…」

また何か一人で言い始めてしまいました…最近の何進の態度が相当気に入らないみたいですな。

「はあ、まあいいわ。今回の賊討伐だけど愁はどうするの？ついてくるかしら？」

「総大將が貴女ならついて行きましょう。私はこの世界の戦いに関しては素人ですからね…学ばせて頂きますよ。」

「わかったわ、愁は本陣で私の指揮を見ていてね。多分今回の戦いで本陣から戦うことは無いと思うけど…」

エン伶は真剣な顔でこちらを見た

「愁は…人を殺したことはあるの？」

私は少し自重気味な笑みを浮かべた

「ええありますよ。自らの剣で人を殺したこともありますし…心配はいりません」

「…そう、わかったわ　ところで愁の武具は…っ」と

エン伶は立ち上がって部屋の隅にあった大きな袋から数本の剣を取り出した。

「前に聞いた話だと、剣術に多少心得があるって聞いたから選んでみたわ」

そういつて机に並べられた数本の剣。

「実際に使って見てもいいわよ？お相手は私が勤めさせて頂きますから」

「エン伶…実際の剣を使うのですよ？それに私は確かに剣帝と呼ばれた人物から指南を受けた身ですが、それも7年前の事。貴女に怪我をさせてしまったら立つ瀬がありません」

ちなみに剣帝とは剣皇ゼオルートの父の異名だ。私はゼオルートから指南を受けたことはありませんからね。

「大丈夫大丈夫　さあ庭に行きましょう？ああ楽しみだわ」

「エン伶：戦の準備を先に済ませなくていいのですか？」

「大丈夫よ　審配にまかせるわ。彼なら安心して任せられるから」

「やれやれ…審配殿も苦勞されますね」

審配とはエン伶に仕える武官である。

知略を得意とした後方から部隊を動かすことに長けた軍師的な側面を持った人物で、年は35才。洛陽においてエン伶が絶大な信頼を寄せる数少ない人だ。

さて、私達は庭に移動し、私は剣を見る。

私はグランワームソードを模した大剣を持っていますが、あれは一応魔力剣の部類に入るので、NGでしょう。

亜空間から武器を取り出さなくてはいけませんしね。

それにグランワームソードに使用しているのは素粒子の段階で鍛えたチタニウムです。とても軽く、それでいて強度は最高。そんな素材を使っていたから大剣を振るえたので今回は普通の剣を選びました。

「それでいいのね？」

「ええ、では…参りましょうか」

エン伶の雰囲気が変わる。

冷たい風を纏ったような殺気。

目の前の彼女がとても大きな存在に感じます。

ですが…

「フッ…」

私は地を蹴る。

そんな気配に気後れはしません。実際に戦ってみなければ相手の力などわからないのですからね

まずは小手調べといきましょうか

私は剣を上段から一気に振り下ろす。

スッ…

残像でも残すように紙一重で交わす彼女

私は剣を振り下ろした体勢のままです

そして彼女の腕が動く

「ハッ！！」

「！？」

私は彼女の腕が動くのを確認して、剣を一気に下から振り上げる

ギンッ！！

彼女が片手で持っていたはずの剣にはいつの間にか両手がしっかりと握られていた。

そして飛び退きながら剣を受け止めて着地した。

「…まさか初見でこれを防がれるとは…お見事です、エン伶」

「…今度はこちらから行くわ」

ドン！！

そんな効果音が聞こえそうなほど凄まじいスピードで一瞬で間合いをつめて来た彼女は剣を乱舞の様に振るう

私はその乱舞の起動に剣を添えて対応していく…が

（クッ…反撃の糸口が見えないだけでなく腕が…）

彼女の軽そうに見える一撃を受けることに腕が悲鳴を上げる…そし

て…

ガキン！！

私の剣は宙に舞った…

しかし…私はエン伶の視界にはいません。

「！？」

エン伶はすぐにバックステップをする

ゴォッ！！

そのエン伶がいた場所に私の足元から伸び上がる蹴りが空を切った…

「…私の負けですエン伶。付け焼き刃の作戦では貴女には勝てませんか」

「ふふ…」

エン伶は笑みを浮かべながら私に近づいてきて…

ドサッ…

私は彼女に押し倒された

「エン伶…？」

そう呼びかけると彼女は首を振った

「麗華」

「は？」

彼女はフウ…と、ため息をついてもう一度言った。

「麗華…私の真名」

「真名？…私に真名を？」

「ええ…一族以外に真名を預けるのは初めてよ…」

真名…自らが認めた相手以外に呼ぶことは許されない神聖な名前。

例え知つていとも認められた相手以外は口にしたら殺されても文句は言えない名前…それが真名だと聞いている

「何故…急に？」

「貴方が最高だから…じゃ駄目かしら？」

「…？」

「だって…とても殿方とは思えないわ。この世界の男はみな普通の女より遙かに強いとは言え…基本的には才能あるものは皆女。」

ふふつと笑う麗華

「それなのに貴方は私をここまで認めさせたわ。普段の補佐役としての的確な意見。今の戦いで見せたような奇をてらった攻撃。そして私の気に動じない強い心…」

そして見せる笑顔

「貴方の世界では男と女の差がどうなのか知らないけれど、私の世界で貴方みたいな男が目の前にいて…心が惹かれない方がおかしいわよ」

「…麗…華…」

「ふふ…こんなオバサンの真名をもらってくれてありがとう。これから麗華って呼んでね 愁」

チュッ

私は麗華から軽く頬にキスをされる。

麗華は私から立ち上がって手を差し伸べた

「貴方は最初に私の所にいるのは一時的なものだと言っていたけど…まだ、私を支えてくれる？」

慈愛に満ちた笑顔。

マサキが年上のウェンディに惹かれるのも少しだけわかる気がするね。

「ええ…麗華がこの国に平和をもたらすその日まで、私は麗華の元で、この世界を生きましよう…」

そうして私は差し伸べられた麗華の手を取った…

南皮へ（前書き）

大分お待たせしたのにこの読みにくい文章…自分には向いてないのかも（汗）

南皮へ

あれから一月がすぎた。

賊の討伐は相手が弱すぎて得るものがなかったため、私は麗華から麗華の注釈つきの兵法書を借りて、それを収めていった。

そんなある日の事

「愁、あなたにお願いがあるの」

「なんですか？」

麗華はいつになく真面目な顔をして言った。

「洛陽から離れて南皮に行って欲しいの」

「エン家の本拠地へ？」

「ええ…もうすぐ世はこれまでに無いくらい乱れるでしょう。私も手は尽くしてるけど、靈帝、十穰侍、何進…自らの欲しか満たさない彼らがいる限りもう時間の問題なの」

麗華は深く溜め息をつく

「時代は群雄割拠の時代に恐らく突入するわ、そうなれば南皮の戦力が私の主戦力になります…でも…」

麗華はお茶を一口飲む

「南皮は私の兄が私の代理として太守を勤めているのだけど…兄は凡庸な人なの。そして兄は娘達…エン紹、エン術を溺愛して甘やかして育てているわ。恐らく世間のことなど何も知らないでしょう」

麗華はまた溜め息をつく。

「群雄割拠の時代に突入して万が一私に何かあった場合…私の後を継ぐのはエン紹かエン術になるわ。その時彼女達が今の調子じゃ困るのよ。それに私や愁だけがエン家の大軍団を指揮するのは将来的に無理があるわ。エン紹やエン術にも一軍を率いて貰わないと多方面作戦も展開出来ないわ」

そして麗華は私の前に腰に差していた剣を置く

「この剣は代々エン家の当主が持つ宝剣よ。これを愁に預けます。

エン紹やエン術に世間の厳しさを教えてあげて…手段は問いません。

」

「…やれやれ、やっかいな頼みごとですね」

「エン家に仕える人間にエン紹やエン術に物を言う人材などいないわ。それに私や兄くらいしか彼女達は言うことを聞かないでしょう。でも愁なら権力に屈することなく彼女達を指導できるでしょう?」

「フツ…何を根拠にそんなことを言っているのかわかりませんが…まあいいでしょう。南皮の本隊を上手く使えなければ、群雄割拠の時代到来の好機を逃してしまうでしょうしね」

「ええ…この任務にエン家の未来が…この国の未来がかかっている

の。お願いね、愁」

「わかりました、少々荒療治になるかも知れませんが手を尽くしましょう。ところで麗華、南皮へは直ぐに立たねばなりませんか？」

「出来れば早く行つて欲しいけど……どうしたの？」

「出来ればトウガイを南皮に連れて行きたいのです、もし彼女がエソ家に仕える気があるならば、今のうちから私の懐刀として育てておきたいのでね」

「例の彼女ね。わかつたわ、出立は一週間待ちましょう。その間に彼女を説得して下さい」

「ええ、そうしましょう」

そしてその夜、私はトウガイに会いに店に足を運んだ。

私は仕官の話を持ち出しました。

「トウガイ……貴女にお願いがあります」

「な……な……なん……で……しょう……？」

トウガイは私に慣れて来たのか、私には少しか言葉が発してくれるようになりました。

どうやら言葉を喋ろうとすると、言葉が喉に詰まってしまふ病なんだそうです。

一生懸命喋ろうとしてくれるトウガイに合わせて私は話しを続けます

「貴女をまずは私の書記官としてエン伶軍に迎え、南皮の地へ共に行って頂きたいのです」

「え…？」

「私は貴女の文才を高く評価しています。洛陽にいるエン伶軍の誰よりも貴女の書く文字は綺麗です。そして文章を相手に上手く伝える才能があるように感じます。」

「そ……そんな……こ……と……」

「謙遜する必要はありません。私が比較したのですからね…。それにトウガイ、貴女は元々武家の出です。こういったお店で働くよりも国で働く方が望みではありませんか？」

「そ……れ……は……」

「今でも訓練は欠かさずしているのでしょう？貴女の武や知次第では書記官では無く私の副官に…そしてゆくゆくはエン家の將軍職につくことも可能です」

「……」

トウガイは私の手を取り文字を書き始めた

（確かに魅力的なお話です。愁様が私を必要としてくれてる事もとても嬉しいです…でも…）

トウガイは私を見上げる

（私は母や妹を養わなくてははいけません。家の事や母の看病なども私がやらないといけないんです…だから…）

「トウガイ、それについては心配には及びません。既にエン伶から家族や貴女がエン家の城に家族と共に住む事や、貴女が職務につける間の世話役、万が一貴女に何かあった場合もエン伶軍が貴女の家族を必ず守る事など全て許可は頂いています。…後は貴女次第です、トウガイ」

トウガイは視線を下に落として考えこんでいる…無理も無い。喋れないトウガイが名門エン家から仕官の話しがくるなど想像もしていなかったはず。

ですが武家の生まれであるトウガイはやはり国に仕えるのは憧れであり夢だと以前聞いていました。

その機会が今、ここにある。

（家族と…相談してみます）

文字を書き終えたトウガイが強い力を持った眼差しを向けてくる。

とても普段は娼婦をしているとは思えない。

「わかりました…決意が固まったら私を城まで訪ねて来なさい」

彼女に通行許可証となる木札を手渡す

まあ実際には通行許可証を見せると初めて私の所まで彼女が訪ねて来たという情報が回ってくる仕組みなのですが。

彼女は木札を受け取ると…ペコリと頭を下げて店の奥に消えていった。

さて、あれから4日…彼女はどのようなのでしょかね。

「愁様、宜しいですか？」

執務室の外から兵士に呼びかけられました

「どうしました？」

「ハッ、トウガイと名乗る娘がこちらの許可証を持って参りました。どこかにお通ししますか？」

来ましたね…

「ええ、執務室に通して貰って構いません」

「ハッ!!」

しばらくして

「愁様、御客人をお連れ致しました!!」

「ご苦勞でした、あなたは下がって下さい」

「ハッ!!」

そして執務室の扉が開く。

「…ほう」

そこには紫を基本とした衣服を纏い、更に紫に近い黒の鎧をつけたトウガイがいた。

流石に武器は携帯していないようですが…

「よく来てくれましたトウガイ。ここに来たということは、私達に力を貸して頂けるのですね？」

「は……い!!」

トウガイは入り口付近から私の正面に立つと片膝をついて頭を下げた

「わ……わたし……は……し……愁様に……お仕え……い……致します」

「ありがとうございます、これから宜しくお願いしますよ」

そして私はトウガイを私の前まで呼んだ

「その格好で来たということは…武官としても役に立ちたいということですね？」

トウガイはコクツと頷いた

（知つての通り私は元々武門の生まれです、幼い頃から鍛錬をして参りました…確かに娼婦として働いていた間は満足に修行できているとは言えません。ですが、長刀の扱いには自信があります。兵法も必死に収めて参りました。勿論愁様の補佐として文官の役目も出来る限り果たすつもりです。ですから愁様…私を…武官としての私を試して下さい）

「いいでしょう、まずは武力を試させて貰いましょう」

「ハッ…!!」

私とトウガイは中庭に出た。

私は剣を構える

彼女も先程は兵に預けていた長刀をやや下段に構えた

「では…始めましょう」

私は地を蹴り一気に長刀の射程から剣の射程まで間合いをつめようと
するが…

「…!!」

彼女は足元を神速とも言える速さで凪いでくる

私は即座に軽く飛び、着地後すぐに後方に飛んで距離を取った

「速いですね…あの速さなら勢いに乗って前に飛んでいたら二撃目を
空中で食らうことになりましたね」

彼女は真剣な眼差しでコクリと頷いた。

その後、私はなんてか間合いをつめようとするも全て神速の攻撃の
前に後退を余儀なくされます

「仕方ありません、ならば…」

私はまたトウガイとの距離を詰める

当然トウガイは長刀を振るつ、私は空高く舞い上がった

「!?!」

彼女は直ぐに態勢を空中にいる私に合わせました…ですが

「避けて下さいよ」

ビュン！！

「！？」

私は剣を上空から彼女に向かって投擲する

彼女は長刀でそれをはじきましたが

既に眼前には私があります。

グッ！

空中で彼女の長刀の柄を掴み、着地すると、身構える彼女を無視して私は足をあげて長刀に力カトを落とします。

「！！！」

しかし彼女は長刀を離すと一気に私に飛びかかりました

「チッ！！！」

足を上げていたのが命取りになり、私は彼女に押し倒され、眼前に拳を置かれました。

「…フッ…この世界の女性は本当に強いですね。私の負けです、貴女の武…しかと見せて頂きましたよ」

「は…い！」

トウガイは私から退いて片膝をついた。

「トウガイ、南皮についたらあちらで兵の指揮も見せて頂きます。
まずは私の護衛兼補佐役として私に仕えて下さい」

「ハッ！！」

そして彼女は顔を上げて言った

「朔…夜…で……す…」

彼女は深呼吸をする

「わ…たし…の…真…名…」

「いいのですか？」

「は…い…」

「わかりました…朔夜。これからは私と共にこの乱世となるであろう世を歩みましょう」

「ハッ…!!」

side 麗華

私は愁からトウガイさんの紹介を受けて彼女と会った。大分緊張していたようだけど、とてもいい目をしていたわ。

将来エン家の支えになってくれるといいわね…

「では麗華、私は南皮に向かいます」

その後、愁が南皮に旅立つ前に最後の挨拶に訪れた。

「ええ、南皮の事をお願いね、愁」

「努力しましょう。では世が乱れたらまたお会いしましょう」

「ええ その時を待ってるわ」

「フッ…」

私は彼にいつも通りの笑顔を送り

愁は笑みをこぼしながら部屋を出た。

足音が遠ざかり、やがて聞こえなくなる

（良かった…何事も無く送り出せて…）

私は安堵の息をついた…でも直後。

ズッグン！！

「…うつ…あつ…！！」

ガタッ！！

私は胸の中心を手で抑えて机に頭をつける形で倒れ込む

「はぁ…はぁ…はぁ…グッ…！！」

胸が痛い…胸の痛みに関連して今度は体中が激痛に襲われる

「うぁ…がっ…！！」

しばらくして痛みは引き、私は全身に汗を書いて、荒い息をついていた

（…もう…私は…、せめて愁があの子達に道を示すまで…そして乱世が訪れるまで…）

「はぁ…はぁ…お願い…持って…私の…体…」

誰もいない部屋で私は誰に言うても無く呟いた。

エン姉妹と教育係（前書き）

やっと原作キャラが登場です。相変わらず面白くない話ですがどうぞ。

エン姉妹と教育係

数日後：私と朔夜達家族、数百名の護衛は無事南皮へとたどり着いた。

そのまま街の中を視察しながら進み、南皮の宮中にたどり着く。

そして兵士に案内され、私と朔夜は謁見の間に通されました

その二つの玉座に座っているのは金髪の立てロールを四本にも分けた娘と、まだ子供な金髪を腰まで伸ばした娘だった

周りにはエン家の主要人物と思われる者達が控えている。

私はそのまま玉座の下まで来ると歩みを止めた。

「お初お目にかかります。伝令から報告は受けていらつしやるとは存じますが：私は洛陽にてエン伶の補佐役を勤めます愁と申します。こちらに控えるのは私個人の副官でトウガイと申します。以後お見知り置きを」

朔夜が片膝をついて礼をする

私はしませんけどね

金髪縦ロールの方が少し眉を潜める

「わたくしはエン家の次期当主継承権一位のエン紹ですね。こちらのはわたくしの腹違いの妹でエン術です。麗華お様の補佐役でしたわね？…その補佐役がどうして南皮にいらっしゃるんですの？何かございました？」

鬱陶しそうな目で愁を見るエン紹

「フツ…私は麗華の頼みでエン紹殿、並びにエン術殿に様々な事を教えるために来たのです」

先程の挨拶とは一転してふてぶてしい態度をとる

「なっ…貴方お様の真名を！！」

エン紹が玉座から立ち上がって場が一気に殺気立つ

「お主…麗華お様から真名を許されておるのか！？」

エン術は殺気こそ放っていないが驚きに満ちた表情をしている

「ええ…私は麗華から真名を許されています、例えば姪のエン紹殿にも口を挟まれる筋合いはありませんよ」

「うつ…ま、まあいいですね。それにしても教育ですって？わたくしには既にカク図、美羽さん…エン術には張勲がその任についていますわ」

「フツ…ならばまず私が貴女達の能力を試験します。それが私を納

得させられる結果ならば教育普通の教育はその者達にお任せしまし
よう」

「いいですわ！！このわ・た・く・し・の実力を思い知って洛陽に
帰るといいですわ！！」

彼女が挑戦を受諾した時に頭をかかえる文官が一名、あれがカク図
ですか。麗華の話ではエン家への忠誠心は高く、頭もそこそこキレ
るものの出世欲が強く、兄に何回か同僚の讒言をしているとか…

完全に熱くなってるエン紹に対してエン術は腕を組んで「うーむ…
試験のう…」

などと一人ごちている

「エン術殿、何か問題が？」

「いやのう…わらわの教育係というても…まだわらわと張勳は出お
うて4日しか立っておらぬのじゃ」

「そうですか…ならば前任者から学んだことを…」

「いやそれが…」

私の言葉を遮りエン術は少し困った顔をする。

「わらわは読み書き以外習った事がないぞ」

……予想外。

名門の娘だから3、5歳から教育ははじまっているものだと思っていましたが…一体麗華の兄は何を考えているのでしょうか。

「わかりました、エン術殿の教育係の張勲を後で私の部屋に來させて下さい。それから考えます」

「わたくしはどうするんですの？」

エン紹が首を傾げる

「試験まで七日与えます。今までエン紹殿が学んだ事を今一度復習しておくんですね」

「フン、わたくしにそんなもの必要ありませんわ！！全く無礼な男ですこと…カク図、行きますわよ」

エン紹はカク図を連れて謁見の間を出て行ってしまった

「…姉上は相変わらず怒りっぱいの…あっそうじゃ、誰か伝令にあった愁の部屋とトウガイの家族の部屋に案内してやるがよいぞ」

「はっ」

一人の将校っぱいのがエン術に礼をし、こちらにくる

「では、こちらへどうぞ」

「案内痛みいります、朔夜、行きますよ」

コクッ

「ではエン術殿、張勲殿の件は宜しく頼みます」

「ちゃんと伝えとくぞ　ではわらわも部屋に帰るとするかろう」

少し眠そうにしながらエン術も我々とは別方向から出ていった。

…エン紹殿には苦勞させられそうですが、エン術殿はまだ自分が固まっていないように感じます…上手く導ければよいのですが…

そんな事を考えながら歩いていると部屋についたらしい

「では朔夜、明日から宜しく願います」

「は…い！」

私と朔夜の家族の部屋は隣同士らしい。

とは言え私の部屋は他の部屋とは独立しているようですが。

朔夜と別れ部屋に入る

部屋はかなり広く、端には寝台、寝台と逆側の中央奥には机、更に横壁には書庫など揃っていた。

執務室も兼ねているようですね、これは楽でいい。

洛陽から持って来た書物を書庫に収めて行っているところ…

「あの…張勳です、エン術様からお話があるとお伺いしたんですけど…」

随分と間延びした声だがやや緊張してる雰囲気がある

「ええ、入って下さい」

「失礼します」

入って来たのは紫色の髪を結び、白を基本とした服を来ている少女だった

随分若いのでちょっと驚きましたが

「聞いているとは思いますが、当代エン伶殿の依頼で来ました愁です。以後お見知り置きを」

「はい…えっと、それで何のご用ですか？」

張勳は呼び出された理由がよくわかっていないようです

「貴女はエン術殿の教育係を勤めはじめたらしいですね？」

「はい、試験に合格して正式に任命されました」

「…すみませんが少し教育係の任につくのを待っていて頂けませんか？」

その言葉に明らかに動揺した張勳

「え？ど、どうしてですか？」

泣きそうな顔をする張勳。

少し可哀想な気もしますが仕方ありません

「私はエン伶の依頼でエン紹、エン術双方に意識改革を施さねばいけません。」

「意識改革？」

「ええ、エン紹は今見た限りではプライドばかり先走っている暗君に、エン術はただの子供…といった風に見受けられます」

「エン術様はまだ12歳です、仕方無いと思いますけど…」

張勳が至極もつともな意見を言う、一般的には…ですが。

「彼女達は諸侯の中でも最大の力を持つエン家の跡取りです。洛陽にいるエン伶にもしものことがあれば、当然彼女達がエン家を指揮

する事になるわけですが…」

私は彼女をしっかりと見つめながら言葉を続ける

「その時彼女達が今の調子では、エン家は生き残ることは出来ません。

更に言えばこれから訪れる乱世において、エン家が敗北するような事があれば、戦は泥沼化して苦しむのは国民です。

世が乱れた時、最大勢力の我等エン家が善政を敷き、国を統一するのが平和への近道…恐らくエン伶はそう考えているはずです。

そのためにはまず彼女達が今、時代にどれだけ求められているかを教えねばなりません。

ですから張勳、貴女はしばらく兵法を更に収めるなどしておいて下さい。

彼女達に君主たる心構えが出来た時、張勳、貴女はエン術殿の教育係兼補佐官を勤めて頂きます。

少し長い話でしたが彼女は私の目から一切視線をそらさなかった。

張勳は少し息を吐くといい笑顔を見せた

「あゝあゝカク図様があんな人だから私も教育係になれば、エン術様の元で絶対な権力を持てると思ったんですけどね」

彼女は一旦後ろを向く

「エン術様って可愛いでしょ？私、あの笑顔が大好きなんです。だからあの笑顔を一番近くで見られるように頑張って勉強して教育係の試験に合格したんです。

でも…そっか、やっぱり世は乱れちゃいますか」

そしてまたこちらに向き直る

「わかりました、権力欲は捨てて、エン術様のために私は今しばらく乱世に備えて勉学に励みます。ですがお願いがあります」

「…なんですか？」

「エン術様の笑顔を消してしまうような教育だけはなさないで下さいね。

あの笑顔は私が一番欲しい宝物なんですから！」

「…善処しましょう」

「善処か…まあいいです。では私は戻ります。ご用があればまた呼んで下さい」

そういつてすぐに頭を下げ出ていった。

張勲はエン術の事を大切に思っているようですね…それにしても…

「普通権力を欲していたなどとは私を前にして言いませんよね」

まあ諦めたから許してという意味もあるのでしょうか…なかなか面白い人ですね。

さて…まずは明日、エン術の方から指導を開始しますか。

ある程度考えていた指導方を頭の中で整理しながら書物の整理を再開した。

エン姉妹と教育係（後書き）

シュウが主人公だからなかなかギャグを入れられないのが悩みです……
それでわ。

エン家改革…エン術編（前書き）

ちよつとどう展開させるか悩んでたらいつの間にか一月たってました…（汗）

相変わらずの駄文ですがどうぞ

エン家改革…エン術編

次の日…私は朔夜と共にまずエン伶の兄を訪ねた

皆と同じく金髪のなかなか美形な中年である

「お初にお目にかかります、私は洛陽にて麗華様の補佐を勤めている愁と申します、こちらに控えるのは我が副官のトウガイです」

「ふむ、して用件はなんじゃ？」

「いえ、先日は太守様に目通りが叶いませんでしたのでご挨拶を…」

「ああ、さようか。麗華からの手紙では君がいかなる事をしても手出しないことないように書いてある。報告も必要ない、好きにしてくれ」

さして興味も無さそうに手をシッシとふる。

「…はっ。では失礼します」

私と朔夜は部屋を出てエン術の所に向かった

「…あれでは麗華も苦勞するでしょうね」

つい独りごちてしまう。

「…で、でも…これで…愁様が…動きやすく…なりま…した…」

「そうですね、あの男に邪魔をされることはないでしょう、後はエン術、エン紹に灸を据えればいいだけです」

「…愁様、顔が…楽し…そう…」

「フッ…」

しばらくしてエン術の部屋に着いた。

部屋に入るとエン術が長椅子の上で寝っころがっていた。

「おお…ようきたの。して何をするのじゃ？」

「エン術殿にはまず民に関する考え方をお聞かせ願いたいと」

「民？民などにいちいち頭を使ったり気を使わねばならぬのか？父上も姉上もそんなことしておらぬぞ？」

「ならば貴女個人にとって民とは？」

「ふむ？わらわ達に従って生きるものでは無いのか？」

本当にわからないと言った様子で答えるエン術

「…なるほど、では最近民は飢えに苦しみ、飢えを凌ぐために賊と
なつて更に弱い民から食料を奪い殺すような事態になっています。
勿論南皮は麗華の政策でマシな方ですが…このことについては？」

「と言われても…飢えとはなんじゃ？」

…以外と重症だった。本当に世間の事や常識を知らないようだ。

「…そうですね、では体験して頂きましょう」

「なぬ？」

私は笑顔で言った

「これから二日間、水以外は与えません。部屋から出ることも禁止
します。以上です」

「ちょ！？それはどういうこ」

ボタン！！

私とトウガイは部屋を出た。そして控えていた洛陽から連れて来た
兵数人に部屋を固めさせてその場を後にした。

「愁様…やり方が…強引…」

朔夜は後ろを振り返りながら心配そうな表情を見せる

「飢えを経験した事が無いエン術に二日間は辛いかも知れませんか」

それにエン術はまだ幼い。だから本当は3日の所を2日にしたのですが…

「…それに…あのやり方だと…愁様に…恨みを…持つ…可能性…が…」

朔夜は腕を組み、顎に人差し指の関節を当てて考えている

確かに朔夜の言う事はもったものだ。

ここでエン術の恨みを買えば、後々厄介な事になる。最悪エン術を追放しなければならなくなるかも知れない

「…この荒療治が成功しなかったらエン術殿に後々実権が行かないようにすればいいでしょう。問題を起こせば追放です。…出来れば避けたい所ですが」

「…はい」

そして、エン紹や家臣達の抗議もどこ吹く風とかわしつつ、二日が過ぎた。

私は朔夜を伴い、胃に優しい食事を持ってエン術の部屋に向かった

ガチャ…

扉を開けるとエン術はベットの上で横向きに体を丸めてグッタリしていた。顔が青く、ハア、ハアとか細い息を吐いていた

ベットの近くに壺があり、そこから異臭が漂っている

恐らく胃液を吐いたのだろう

エン術はこちらに気づき、私の手にある食事を目にする

「あ…食事…食べさせてたも…」

私達はベットに行き、私はエン術の体を起こしてやり、朔夜が食事をゆっくりと食べさせた。

ほどなくして食事を終えてエン術は寝てしまった。

私達はエン術が起きるのを部屋で待ち続けた。

「うつ…んん…」

エン術は三時間後に目を覚ました

顔色も少しよくなり自分で起き上がった。

「さて、エン術殿。飢えというのがどういふものか多少は理解でき

ましたか？」

「二度とあんなのはごめんじゃ…酷いのじゃ愁…」

「ですが民が苦しんでいることは理解できたでしょう？」

「…民は毎日あんな思いをしておるのか？」

エン術は悲しそうな目をこちらに向ける

「洛陽、南皮においてはそこまで酷いことにはなっていません。ですが、エン家の息が及ばない場所では食べる物に困る地域も多々あります。」

「…可哀想にの」

「エン術殿、もし貴女がエン家ではなく只の民として生まれていたら、こういう目に合っていたのは貴女だったかも知れません」

「…生まれる家は選べないからの…」

「そうですね、生まれた時から既に苦しんでしまうような世の中なのですよ」

「…民を助けなければならぬ…麗華おばさまの政治を中華に広めて飢えなど無くさねばならぬのー！」

キツと目に決意を宿らせたエン術、想像以上に効果があったようですね。

「その通りです。そして万が一麗華に何かあった場合、麗華の政治を受け継ぐのは貴女やエン紹殿になります。」

「わかったのじゃ、わらわはこれから勉学に励むのじゃ!! 麗華おばさまを目標にして様々な事を覚えて行くのじゃ!!」

「フツ…結構。では張勲と共に勉学に励んで下さいね。」

そして陶器に入れた一杯の水を差し出す

「二日間耐えたご褒美です、貴女は蜂蜜水が好きだと聞いたのでね」
そう言つてエン術に蜂蜜水を渡した

「んぐっ…んぐっ…」

エン術は一気飲みをした後にパアッと顔を輝かせた

「うまい!! なんじゃこの蜂蜜水は!？」

「貴女がいつも飲んでいる蜂蜜水とは蜂の種類が違うのだと思います。商人がこれは貴重だと言っていたのでね」

エン術は陶器を握りしめ何かを考えていた

「…こんなおいしい蜂蜜水を皆が飲める時がくるといいのう」

「それを実現できるかは貴女次第ですよ。」

「うむ…！やる気が出てきたのじゃ…！」

「フツ…では私達はこれで」

部屋を出て行こうとする私にエン術は声をかけた

「愁…！ありがとうなのじゃ…！わらわはこの大陸から必ず飢えを無くして見せようぞ…！」

私はエン術に笑顔を向けて立ち去った。

「良…かった…ですね」

朔夜が歩きながら笑みを浮かべてこちらに話しかけて来た。

「ええ…想像以上に効果がありました。彼女はまだ心に色がついていない状態だったのでしょう。これからは私達が彼女を良き方向に導いて行けばいいのです…貴女も頼みましたよ、朔夜」

「は…い！」

さて、問題はエン紹殿ですね。

出来れば現時点で強大な勢力であるエン家を一枚岩にするためにも彼女にも志を持っていたきたいのですが…ね。

そんなことを考えながら私達は執務室に戻った

エン家改革…エン術編（後書き）

エン紹…どうするかまだ決めかねてます（汗）

感想受け付けを全体に修正しました。

エン家改革…エン紹編（前書き）

やっとできた…

まあグダグダ、やっつけ感満載ですが（汗）

エン家改革…エン紹編

side 朔夜

「…これは…」

愁様は目の前にあるエン紹に出した主君として必要な事などを質問した紙を見て愕然としていた

郭凶殿はそんな愁を見て顔から滝のように汗を流しています

それはそうですよね…

戦に勝つにはまず何をすればいいか？

【全兵力を持って華麗に前進すればよろしいですわ】

民に安寧をもたらすにはいかような政治を行うべきかあなたの思想を教えて下さい。

【エン家の民となったからには何も案ずることなどありませんわ。後は大陸をエン家が統一するだけですわ】

などなど

何を質問しても華麗とかなんとかで具体的な解答は得られない始末です。

エン紹様本人を下がらせた愁様は教育係の郭図殿に視線を向けました

「郭図殿？現在漢で最も力を持つエン家の跡取り候補に一体何を教えて来たのですか？」

「うつ…わ…わしは麗華様に不快な思いをさせぬようにしてきただけじゃ…！」

「つまり教育係とは名ばかりというわけですね？失望しましたよ郭図殿…あなたをエン紹殿の教育係から外します。異論はありませんね？」

「クツ…」

「では下がっていいですよ」

郭図殿は愁様を一別して部屋を後にした。

「愁様…郭図殿は…エン紹様を…跡継ぎになった後に…いいように…操るつもりだったのでは…」

「恐らくそうでしょうね。全信頼を受けてエン家を思うがままにしようとしたのでしょう」

「…あのまま生かして…おくのですか？」

「問題があれば排除するだけです。それより今はエン紹をなんとか

しなければなりません」

「…どうするおつもり…ですか？」

「まずはエン術にしたように民がどんな思いでいるか理解し、民を慈しむ心を育てなければならぬでしょうね」

「…愁様…恐れながら…エン紹様は…生半可な事では…変わらないと思います…」

「…また強引な方法になりますが…朔夜、すみませんが今夜エン紹殿に地下牢にお越しいただけるように言付けをお願いします。」

「はっ…」

――――

夜…私はエン紹様を伴って地下牢に来た。

地下牢の入り口には数人の看守がいて警備は万全のようだ。

看守が言うには愁様は地下牢のかなり奥の方にある重犯罪を犯した者達がいる区画にいるらしい

「…薄気味悪い所ですわね…」

エン紹様はこの雰囲気苦手のように顔をひきつらせている

私はエン紹様の手を引きながら奥へ進んで行った

しばらく進むと薄暗い光の先に愁様が椅子に腰掛けて待っていた。

愁様が言うにはこれだけ長い距離があるのは脱走などが起きた時に地下牢出口を封鎖する時間を稼ぐためだとか。

愁様は看守から預かった鍵を使い牢の一つに入った。

そこには手枷足枷をつけられた囚人がいた。

「さてエン紹殿…ここにいるのは南皮の大勢民を殺めた賊です」

愁様の言葉に自国の民を大勢殺されたと知ったエン紹様は怒りを露わにする

「許せませんわ！！愁さん！！処刑してしまいなさい！！」

胸を張って愁様に申しつけるエン紹様…ですが…

「いえ、エン紹殿。罪人の処刑は貴女がするのです」

「なっ！？こ…こんな下賤な輩にわたくしの手を汚せと言いますの！？」

のけぞりながら焦った様子で抗議するエン紹様、ですが愁様は涼しい顔で答えた。

「はい、その通りです。では剣をお持ち下さい」

愁は剣をエン紹様に渡します

エン紹様は渋々剣を取り、罪人に向けて構えます

「さあ相手は我が国の民を殺した罪人です。エン紹殿、お裁きを」

「うつ…」

エン紹様の剣を持つ手が震えています…ああなるほど、エン紹様は…

「どうしました？ああ、エン紹殿はまだ初陣をしていませんでしたね？ならばまだ人を殺めたことがないのですね」

「そ、そうですね！！わたくしが最初に人を殺めるなら華麗な初陣と決まっていますわ！！まったく愁さんも気が効きませんこと！！」

自分が殺さなくてもすむ流れにほっとした様子のエン紹様。

「ではエン紹殿、剣を私に」

「ええ、まかせますわ」

エン紹様から剣を受けとった愁は剣を無造作に振り上げる

「フツ…流石に賊の大將だっただけに肝は座っているようですね…ですが…」

愁様は剣を肩に振り下ろした

スブシュ！！

「グッ……！！」

賊が苦悶の表情を浮かべて一気に汗が吹き出る

「貴方の配下は夫の目の前で妻を陵辱しながら、夫が死に至らぬように加減しながら殺したそうですね」

「グッ……」

剣を肩から引き上げ、また無造作に剣を振る

スバツ！！

「ぐあああ……！！」

今度は太ももに剣が振りおろされた。但し剣は骨で止まり、おびただしい量の血が流れるだけで賊はまだ生きている。

「うつ……」

エン紹様はその光景を見て吐き気を催したのか、口に手を当てている

「エン紹殿、目をそらさないで下さいね？ 賊に襲われた民がどういう死に方をするのか……今、彼を使って貴女に見せているのですからね」

愁様は薄く笑みを浮かべて剣を太ももから離した。

「さて…衛兵!!」

「はっ!!」

愁様の呼びかけに答えて現れた衛兵は一人の美女を連れていた。

「なっ…!!」

賊が驚愕した声を上げる

「あ…あ…あ…!!」

女も賊を見て涙を流した

「さて、残念ですがあなたが逃がしたあなたの女もこの通り、エン家の兵が捕らえましたよ」

「な…あいつに何をするつもりだ…!!」

「さて？あなたがたは先ほど言ったように夫の前で妻を陵辱したそうですね。」「私にそんな趣味はありませんからね。」

そういつて女の前に移動する愁様

「あなたの部下の証言によれば最初はあなたが攫って来た娘だったそうですね？ですが後にあなたの女になったとか…」

そういつて愁様は視線を女に移す

「最初はあなたも彼に何もかも奪われた被害者だったそうですが…彼の女になることにより、哀れな末路から逃れられたそうですね…ここまでなら同情できるのですが…」

愁様は言葉を続ける

「あなたはこの賊に自分の村に救援を送らなかった裕福な村を襲わせたそうですね。」

「そ…それは…」

女の顔が引きつる

「確かに援軍を派遣しなかった裕福な村を恨む気持ちはわかりますが…そんな事を頼んだ時点であなたにはもはや同情の余地はありません。あなたの願いにより多くの命が亡くなったのですからね…」

「うつ…じゃああたしの恨みはどうしたら良かったのさ！！あたしはただ平穏に暮らしていければそれで良かったのに…彼の配下の独断で村が襲われて…救援を求めたけど誰も助けてくれずにみんな死んじまって…あたしはその配下に献上品として彼に…あたしは生きるために彼の女になった…後で聞いて見たらあの村は大金を払って自分達の村を見逃してもらって代わりにあたし達の村が彼の配下に

襲われたって言うじゃないのさ…だから彼に頼んでそんなふざけた理由であたし達の村を襲った彼の配下を殺してもらってあの村も襲ってもらったのさ…！」

深い闇を瞳に写して女は叫んだ

その話を聞いていたエン紹様は何も言葉を発することが出来なかった
今までは下々の者達など気にも止めなかったがこうして目の前で、
感情剥き出しにしている女を見てはとても自分には関係無いという
気分にはなれないのでしよう

「そうですね…その裕福な村には僅かながら駐屯兵もいたと聞きます。これは彼の部下やその村だけでなく、エン家の落ち度でもある
でしょう…」

エン家の落ち度と聞いた瞬間にエン紹様がピクリと肩を震わせる…
そしてそのままうつむいてしまった

「…残念ですがあなた達の死刑執行日は今日です。一つの村を壊滅
させた要因を作った女に、弱き者から略奪を繰り返した賊の頭領よ
…さらばです」

そういつて愁様は先ほどとは違い、目にも止まらぬ速さで剣を一閃
した

プシュウ…

その瞬間に女は首から上が無くなり、体が崩れ落ちた。

首から上だけになった顔は涙と絶望にそまっていた…

「沙奈!!」

頭領がおそらく女の真名を叫ぶ。

しかしその瞬間…

愁様の一閃が男の命を奪った。

—————

地下牢を出てエン紹様の部屋へ着いた。

エン紹は長椅子の隅にもたれ掛かる形で腰を下ろし、愁様と私はその対面の長椅子に腰掛けた。

「…愁さん？」

「なんでしょうか？」

「貴方は…恐ろしい人ですわね…」

「…さて、どうでしょうね？」

「理屈はわかりますわ。あの女がしたことによって更に多くの命が失われたと。でも殺してしまうことは…」

「エン紹殿、あの女の話に出てきた村人は全滅した訳ではありません。まだ生き残りも大勢います。そんな中、自分達の村を襲わせた女が生きていることをどう思いますか？」

「でも…元はと言えばあの村が賊と取引したのが「全員が取引に参加した」と思いですか？」うつ…」

「エン紹殿、恨みは恨みを呼びます。負の連鎖を断ち切るにはどちらかを成敗しなければ禍根が残るのです。ですが我々には別に出来る事があるはずです」

「…民を富ませ、賊など出ないような世の中にする…ということですわね」

「その通りです。今回貴女がその事に気付いたただけ中華の民にとって大きな収穫になるでしょう」

「…何故ですか？」

「エン家は現在中華最強の勢力を誇ります。その時期当主が己の役割を見いだしたのです。これからはエン家が支配する国は少しずつ民が平和に、豊かに暮らせる国になって行くはずです。今貴女が言った民を富ませ、世を平和にするとの言葉に偽りがなければ…ね」

「偽りなどありませんわ！！わたくしの目の届く場所では二度とあんな話のような事は起こさせませんわ！！」

「フツ…ならば結構。これからしばらくはエン術様と共に良き時期

当主となるべく勉学に励んで頂きましょう」

「…美羽さんも時期当主に？何故ですか？」

「フツ…それはまだ秘密です。ではエン紹殿、今日明日はゆっくり心と体を休めて下さいね。朔夜、行きますよ」

「…はい」

—————

愁様とも別れて私は自分の部屋の寢床で目を空けていた

愁様は確かに恐ろしいことや、相手に苦痛を与えることを平気で実行する冷徹な所がある

けど私は愁様の優しさを知っている。

洛陽で娼婦だった私を拾ってくれたことは一生忘れない…

私は…愁様が例えどんなに残酷な策略を用いても私は愁様について行く。

例えば私が実行することになっても必ずやり遂げてみせる

それが中華に平和をもたらす一番の近道と信じて。

愁様…お休みなさい。

私は決意を固めて目を閉じた

エン家改革…エン紹編（後書き）

麗羽がこのくらいで改心するかどうか微妙なところですけどそこは原作破壊ということで多めに見て頂けると助かります（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6439o/>

シュウ・シラカワ、外史に降り立つ

2010年12月28日10時47分発行